

日本語学習者と日本語母語話者の課題達成談話

— 接触場面における配慮行動に注目して —

古田朋子 (関西大学) 山本晃彦 (鈴鹿大学) 張盛傑 (無所属)

1. はじめに

グローバル化が進み、日常生活やビジネスなどの場面で日本語母語話者と非母語話者の接触場面が増えている。使用言語だけでなく、文化的な背景が違う話者間において円滑なコミュニケーションを図るために、参加者はどのような工夫をしているのだろうか。とりわけ、課題の遂行や問題解決が要求される場では、相手に意見を求めたり、自らの見解を述べる必要がある。そのような場では、自分の主張を相手に押し付けないように、話し手や聞き手に配慮を示す言語行動が見られるはずである。本発表では、中国語母語話者3名と日本語母語話者1名の接触場面における課題達成談話を取り上げる。そして、課題を達成するために、母語話者と非母語話者間でどのように関係構築がされるのか、また、どのような配慮行動を用いるのかを考察する。

2. 先行研究と研究目的

ファン(1999)、大場・中井・土井(2004)は、非日本語母語話者のみの第三者言語接触場面における初対面会話について論じている。まず、ファン(1999)は、会話参加、言語バリエーションの選択、意味交渉の3つの観点から言語問題の管理プロセスを分析している。それによれば、第三者言語接触場面では、弱い基底規範しか成立しないこと、言語ホストゲストの関係が成立しないことを挙げている。大場ら(2004)は、会話を維持していくために談話技能を身につけられるような会話授業の必要性を示唆している。また、大場(2007)は、非日本語母語話者1名、日本語母語話者2名の三者間の知人グループの会話を分析し、3人での会話であっても、2人で会話が展開し1人は傍観者としての役割を担っていることを指摘した。特に、言語能力の問題から内容が理解できなかったり、発話が十分にできない理由でNNSが傍観者になった場合であっても、参加者間では母語規範に従っていると認識されうるとしている。藤井(2018)は、英語、中国語、韓国語、タイ語の母語話者同士のペアにランダムな状態で15枚のカードを渡し、2人でストーリーを構築し、順番に並べ替えるという課題達成談話を分析している。そして、その共同作業の様子を言語的特徴と言語行動の観点から考察している。それによると、中国語話者は話し手主導で作業を進めるのに対し、日本語母語話者は常に聞き手からの賛同、確認などの反応を求め、両者が融合的に関わりながら作業を進めていたと報告している。本発表では、これらの先行研究を踏まえ、非日本語母語話者(以下、NNSとする)と日本語母語話者(以下、NSとする)が同一グループに属し、さらに、NSがマイノリティである場合、課題遂行時にNNSとNS間でどのような配慮行動が見られるのかを考察する。

3. データ

A 大学で予備教育を受ける日本語学習者の上級レベルを対象とした口頭表現の授業で、消音したドラマの映像に日本語の台詞をつけ、映像に合わせて自分たちで演じるというアテレコ課題を実施した。映像はアメリカのコメディドラマ「ダーマ&グレッグ」の中から約8分間を切り取って使用した。アメリカドラマを選択したのは、ジェスチャーや登場人物の表情が読み取りやすく、場面状況が把握しやすいと考えたからである。この授業の目的は、グループのメンバーが協力して、映像に合った日本語の台詞を考え、さらに映像に合わせて表現するという課題を達成することである。アテレコは既習の文法、語彙、表現のみならず、話し言葉に特徴的に表れる縮約形や助詞の省略などの知識を総動員するため、上級学習者に適していると考えた。

このアテレコ課題は2019年11月30日から週1回、計4回行った。そのうち2回、日本語ボランティアが授業に参加した。分析対象とするデータは、第2回目の2019年12月7日に実施した約40分の授業データである。NSは授業には初めて参加している。授業参加者のプロフィールは表1で示した通り、中国語母語話者(NNS)3名(男性A・B、女性C)日本語母語話者(NS)の男性ボランティアの4名である。NNSのAが20代後半で、あとの3名は20代前半から20代半ばである。日本語能力については、Aが日本語能力試験N1、BとCがN2に合格していた。談話は4名の承諾を得てビデオカメラで収録の上文字化をし、質的な分析を行った。フォローアップ・インタビューは参加者の時間的な都合により行えなかった。

表1. 参加者のプロフィール

	国籍	性別	年代	日本語能力試験
NNS:A	台湾	男性	20代	N1
NNS:B	中国	男性	20代	N2
NNS:C	中国	女性	20代	N2
NS	日本	男性	20代	

4. 結果・考察

表2. 参加者の発話数

NNS:A	NNS:B	NNS:C	NS
239	138	115	88

表2は、各参加者の発話数を示したものである。NNSのAの発話数が顕著に多いのがわかる。表1で示したように、Aは日本語能力試験のN1を持っており、日本語能力がNNSの3名のうち最も高かったのに加え、年齢も一番上だったこともあり、グループをけん引していた。ファン（1999：47）は、参加者が母語ではない第三者の言語によって、インターアクションを行う場面を第三者接触場面とし、談話を分析しているが、日本語の「規範」が緩められ、「言語ホスト-ゲスト関係」が成立しにくいと述べている。しかしながら、本研究のデータでは、非母語話者であるAがホストの役割をし、NSはゲストという関係が見られた。NSが参加したのが第2回目の授業だったため、課題の内容を把握しておらず、3名のNNSと情報が共有されていなかったこと、NSがボランティアという立場で参加していたことが要因ではないかと推測される。

次に、NNSとNSの相互行為においてみられた配慮行動について述べる。本データでは、以下3つの配慮行動が観察された。

1) NNSからNSへの配慮行動

① コードスイッチングと視線

授業開始時、最初の5分間は、NNS3名の共通言語である中国語で行われ、1回目の授業で話し合った映像の中の登場人物の名前や人間関係について確認を行っていた。NSは1回目の授業には不参加であったため、NNSとNS間で情報の不均衡があったと言える。その後、授業開始時に中国語で話された同一内容を日本語、英語にコードスイッチングをしながら、話していた。つまり、NSが理解できる言語で話すことにより、NSと情報を共有することができる。また、NSを排除せず、グループの一員と受け入れていることを示す。また、NNS3名が情報の確認を行っている間、NNSがNSに視線を向けるという行動が観察された。NSへの直接的な発話は伴っていなかったが、NSの理解を促す働きがあるだけでなく、NSをグループの一員として捉えていることを示す配慮行動と考えられる。

② NNSのNSへの質問や確認

以下の会話例1は、登場人物の女性に別の女性が物を投げるシーンについて話し合っている。そして、そのような場合、日本語母語話者はどのような言い方をするのかを、AがNSに聞いている。

<会話例1>

324 NNSA : (物を投げる動作をして、NSを見る) こういう声がありますか?

325 NNSA : おっしや。

326 NNSB : おっしや。

327 NS : 笑い。(口元に手を当てる)

328 NNSB : よっし。

329 NNSA : 何か(動作をしてボランティアを見る)

330 NS : えー、あんまり言わないんじゃない? それ、とか。

331 NNSA : それ(動作)

332 NS : えいとか。

333 NNSA : えい。

334 NNSB : えい。

Aは324で視線をNSを向けることにより、NSに対しての質問であることを明示している。その後、自分で「おっしや」と言うと、続いてBも「おっしや」と言い、NSの答えを得る前に、自分たちが思いつく言い方を例示している。NSはそれらを即座に否定せず、笑いながら考えているように見える。その後、再び328でBが「よっし」と言うと、330で「えー、あんまり言わないんじゃない？」とこれまでのA、Bの「おっしや」「よっし」は不適當であることを示した後、「それ、とか」と一つの例を挙げている。さらに、331でも「えいとか」と例を挙げるとABは続けざまにNSの言った「えい」を繰り返しているのが見てとれる。三枝(2016:15)は、「とか」について、『と』の前に示されるものについて不確定性をしめし、たとえば、「例をあげる働きをしている」と述べている。つまり、NSは「とか」を用いることで、自分の挙げた例が必ずしも一番良いものではないことを示している。

嶋原(2019:169)は、「非母語話者が母語話者に積極的に質問することは、接触場面への経験が少ない母語話者への会話参加を促す配慮行動である」と述べている。会話例1においても、AがNSに324で質問をすることでNSの意見を引き出したり、確認しており、それが、NSの会話参与を促している。NNSのNSへの質問は参与者達の間を構築し、課題を協力して遂行するきっかけとなっていることが窺える。また、相手の発話を「くり返す」言語行動は、藤井(2018)の課題達成談話でも観察されており、330NSの意見を受け入れて、331A、333A、334Bでは実際に発話を繰り返しているのがわかる。

2) NSからNNSへの配慮行動

次に談話の中で観察されたNSからNNSへの配慮行動を見ていく。

①文末の「っほい」

以下に示す会話例2では、登場人物が犬を指して何か言っているのかを考えている場面である。

<会話例2>

- 280 NNSA: 右人差し指を顔の横にあげ、私が一人で (NSの顔を見て) 飼っていた。
281 NNSA: (沈黙) 言えますか?
282 NS: 他に私が一人で (NNSAを見ながら話す)
283 NNSA: 面倒見ていた。
284 NS: 画面を指さして、この人の家?
285 NS: 男の人の家?
286 NNSA: たぶん。
287 NNSB: 女の家 (NSを見て)
288 NNSC: 女の家。
299 NS: 女の人っほくない?
300 NNSB: うん。

ここでも、280でNNSAがNSに質問することで意見を求めている。すると、282でNSが「他に私が1人で」とNNSAを見ながら話すと、NNSAは283でNSの発話を受け取って「面倒見ていた」と文を完成させている。藤井(2018:135)は、これを「リレー発話」と呼び、「もう一人がリレーのようにその筋を引き継いで続ける現象」としている。この例からもNNSとNSが共同で台詞を作っている様子が見てとれる。次に、284でNSがPCの登場人物の男性を指さして、「男の人の家?」とNNSたちに問いかけると、286NNSAと287NNSBのリレー発話があり、二人で「たぶん、女の家」と文を完成させているのがわかる。その後、288でNNSCも同調して「女の家」と述べている。NNS3人の意見が出たところで、NSは299で「女の人(の家)っほくない?」と確認している。Kekidze(2003:では、「Xっほい」という形は「『Xだ』という断定がさげられ、話者の主張がやわらげられている」と述べられている。

会話例1, 2, で示したように、日本語母語話者の意見や評価は課題を遂行するにあたり、不可欠である。特に、問題が生じた場合、日本語母語話者としての意見が求められる。以下に示す会話例3も、登場人物のジェスチャーから、どのような台詞が適切なのかを話し合っている場面である。

<会話例3>

- 206 NS: (PCの画面を指さし) たぶん、見た感じあまり犬好きじゃなさそう。
207 NNSB: 犬、好きじゃない (ボランティアの顔を見て)
208 NS: そうだね?
209 NS: だから、(体を上下にゆすり) なんていうかな? あはは
210 NS: たとえば、僕だったら、(ビデオのジェスチャー、人差し指を上げる) ちょっと待って、犬にひきも飼ってるの?
211 NNSC: う〜ん。
212 NS: そうよみたいな感じでなでて (犬をなでるジェスチャー) はっ、みたいな。
213 NNSB: あ〜。
214 NS: 言ってるかもしれない。
215 NNSA: え、待って (人差し指を上にあげる) え、待って一人で、待って。

- 216 NS : ちよつと待ってみたいな (人差し指を上にあげる) 視線はA
(Aもボランティアと同じジェスチャーをしている.)
- 217 NS : 首をかしげながら, 笑っている.
- 218 NS : ちよつと待ってみたいな. (笑いながらAを見ている)

206でNSは「たぶん, 見た感じあまり好きじゃなさそう」と断定を避けて, 自分の意見を述べている. それに対して, Bも「犬, 好きじゃない」と言いながら, NSに視線を向けている. これは, 文末が下降しているため, NSの意見に同意していることを示している. そして, 208「そうだよね?」とBの意見を確認し, 209では体を前後に揺らしながら考えている. その後, 「たとえば, 僕だったら,」と前置きをして, 「ちよつと, 待って, 犬, にひきも飼っているの?」と自分の意見を述べている. 「僕だったら」という前置きは, あくまで自分の個人的な意見であるということ強調し, 聞き手であるNNSたちにとって, 押し付けがましくないように配慮していると考えられる. また, 212の「そうよみたい

5. おわりに

日本語母語話者と非日本語母語話者の接触場面における課題達成場面において, 非日本語母語話者はコードスイッチング, 視線, 疑問文を用いることで, 日本語母語話者が会話に加わりやすいように, 配慮をしていた. 一方, 日本語母語話者は文末の「とか」, 「みたい」, 「っぽい」などを用いて, 自分の意見や考えをやわらげて, 非日本語母語話者に対して押し付けにないよう配慮していた. また, 非日本語母語話者の中に日本語母語話者が入った接触場面においても, 互いに配慮行動を取ることで関係を構築し, 課題を遂行していたことがわかった. 特に, 日本語母語話者の用いる文末の「とか」, 「みたい」, 「っぽい」は, 主張をやわらげる働きがあることは, 日本語の教科書では扱われていない. 若者ことばの特徴ではあるが, それらの語用論的機能について指導する必要があると考える.

参考文献

- ファン, サウクエン (1999). 非母語話者同士の日本語会話における言語問題 社会言語科学. 2 (1), 37-48
- 福原裕一 (2013). 「みたい